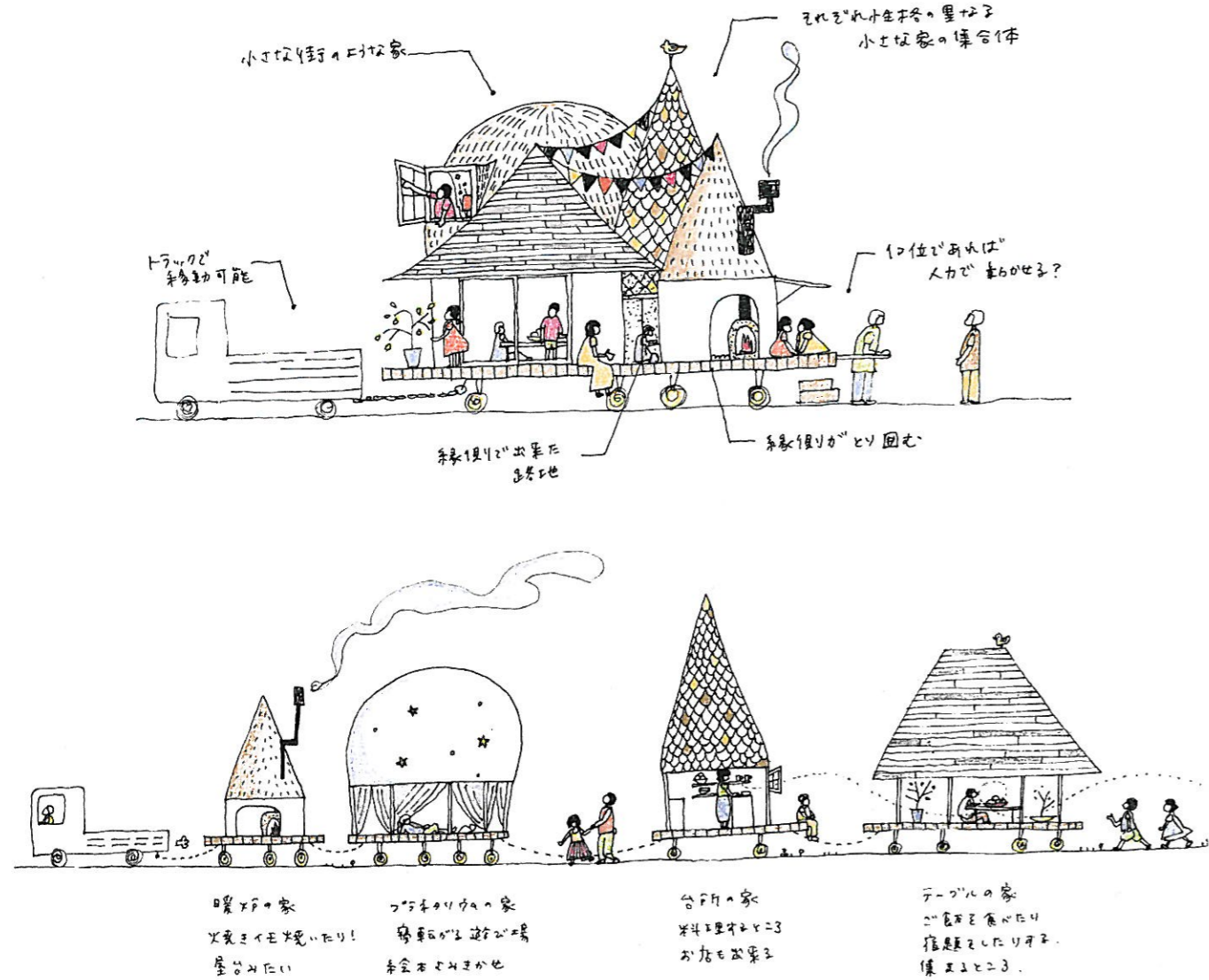


こどものみんなの家

伊東豊雄建築設計事務所+大西麻貴/o+h = 共同設計

宮城県東松島市

右から「お話と演劇の家」「あたたかい家」「テーブルの家」を見る。
 左頁左上/南側から見る全景。隣にある自治会の「ひまわり集会所」とデッキでつながる。
 左頁中央上/板葺きの「あたたかい家」(左)と「テーブルの家」の間にある「ひそひそ話コーナー」。にじり口のような子どもサイズのサッシ開口部が設けられている。左頁右上/「お話と演劇の家」。車輪つきで、山車のように移動することができる。入口、あるいは劇場幕のようなカーテンは、安東鶴子氏によるデザインで、防水のため外側にはレインコートの生地を利用している。



大西麻貴氏による初期案のスケッチ。





右/「あたたかい家」から「テーブルの家」を見る。
 左上/キッチンや薪ストーブのある「あたたかい家」。
 左中央/「テーブルの家」。照明は大西氏によるデザイン。
 左下/こどものみんなの家のこけら落としとして開催されたこどもイベント「ティーパーティー」。
 左頁/回遊性のあるプランを利用して廻り回ることもたち。縁側コーナーもときにはアクティブに利用される。



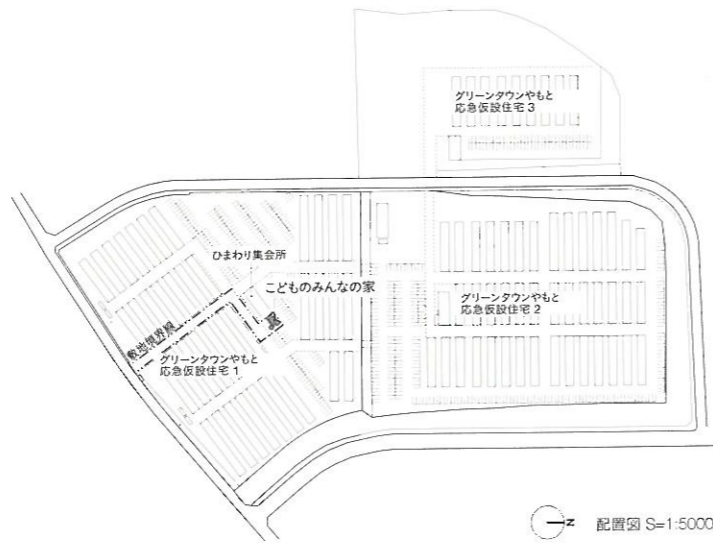
宮城県東松島市の仮設住宅団地の中に「こどものみんなの家」が完成した。ここは約600世帯が暮らす市内でも最大の仮設住宅地だ。Tポイント・ジャパンが取り組む「Tカード提示で被災地の子どもたちに笑顔を。」プロジェクトの一環として、伊東豊雄氏と協働で計画した。共同設計者は、o+hの大西麻貴氏だ。

それぞれ性格のある空間をつくりたかったと大西氏は言う。そのイメージの通り、板葺きで覆われたとんがり屋根の「あたたかい家」、赤いスレート屋根の「テーブルの家」、丸いアルミの屋根で八角形の平面を覆う「お話と演劇の家」など、個性豊かな空間をもった家群が生まれた。それらに囲まれる大小の凸凹した縁側にも「ひそひそ話しコーナー」など名前がつけられた。

よく見ると、「お話と演劇の家」には車輪が着いている。山車のように移動できるのだ。当初のスケッチでは自動車で曳くイメージだったが、大人3人くらいで移動できるものとなった。クリスマスにはサンタクロースとトナカイに曳かれて、そのお披露目を行ったそうだ。クリスマスの飾り付けは、伊東豊雄建築設計事務所、o+hのスタッフが夜なべしてつくった。

他の「みんなの家」同様に多くのデザイナーが参加している。家具はイノウエインダストリーズ、レイノコート素材をつかったというドア代わりのカーテンは安東陽子氏が手がけた。

所在地 宮城県東松島市
 主要用途 集会所(応急仮設建築物)
 建主 Tポイント・ジャパン
 運営 グリーンタウンやもと 応急仮設住宅ひまわり集会所自治会、
 一般社団法人おがのスターズ
 建築設計 伊東豊雄建築設計事務所+大西麻貴+o+h
 構造 オーク構造設計
 家具 イノウエインダストリーズ
 カーテン 安東陽子デザイン
 照明計画 コイズミ照明
 規模 敷地面積 636.10㎡
 建築面積 31.04㎡
 延床面積 31.04㎡
 階数 地上1階
 支援者 T会員の皆さま/シェルター/コイズミ照明/高橋工業/四倉製瓦工業所/佐瀬/YKK AP/チャネルオリジナル/TOTO/田島ルーフィング/田島応用化工/朝日ウッドテック/日進産業/イテダコーポレーション/マグ・インペール/ウエスト/日本暖炉薪ストーブマイスターグループ/オーシカ仙台営業所/グリーンハウザー大平営業所/相原木材/須藤製作所(順不同)



住民の方と一緒に屋外テーブルを製作 2013/1/24



建設中にクリスマスイベントを行った 2012/12/23



気仙沼の高橋工業で「お話と演劇の家」を施工 2012/12/15



竣工式でのもちまき 2013/1/26



「お話と演劇の家」を動かしパレード 2012/12/23



工場で製作された屋根パネルが現場に到着 2012/12/19



松島大曲浜に伝承される獅子舞が登場 2013/1/26



学生ボランティアと天然スレートの間切り 2012/12/26

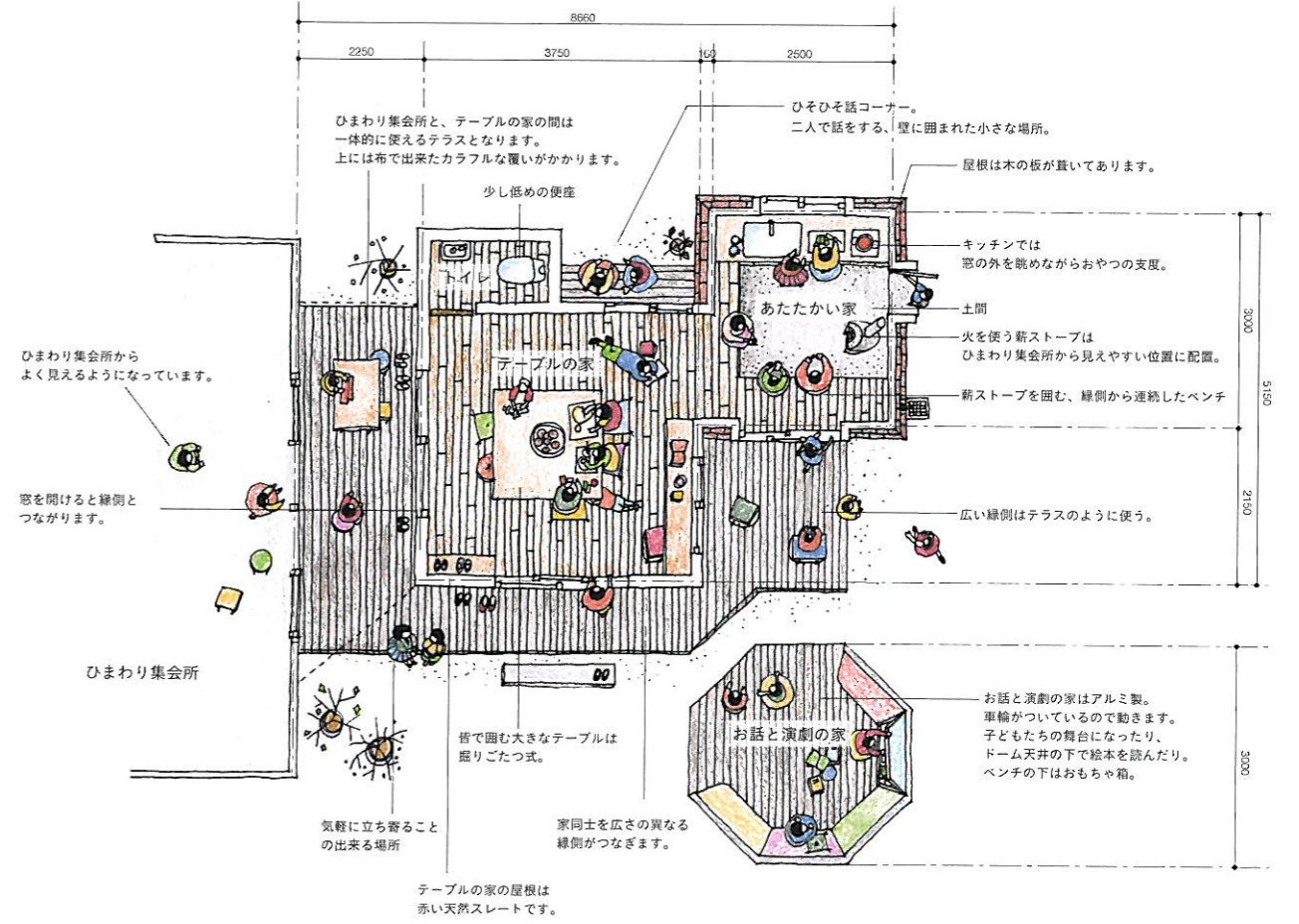


屋根パネルをクレーンで吊りし組み上げる 2012/12/19

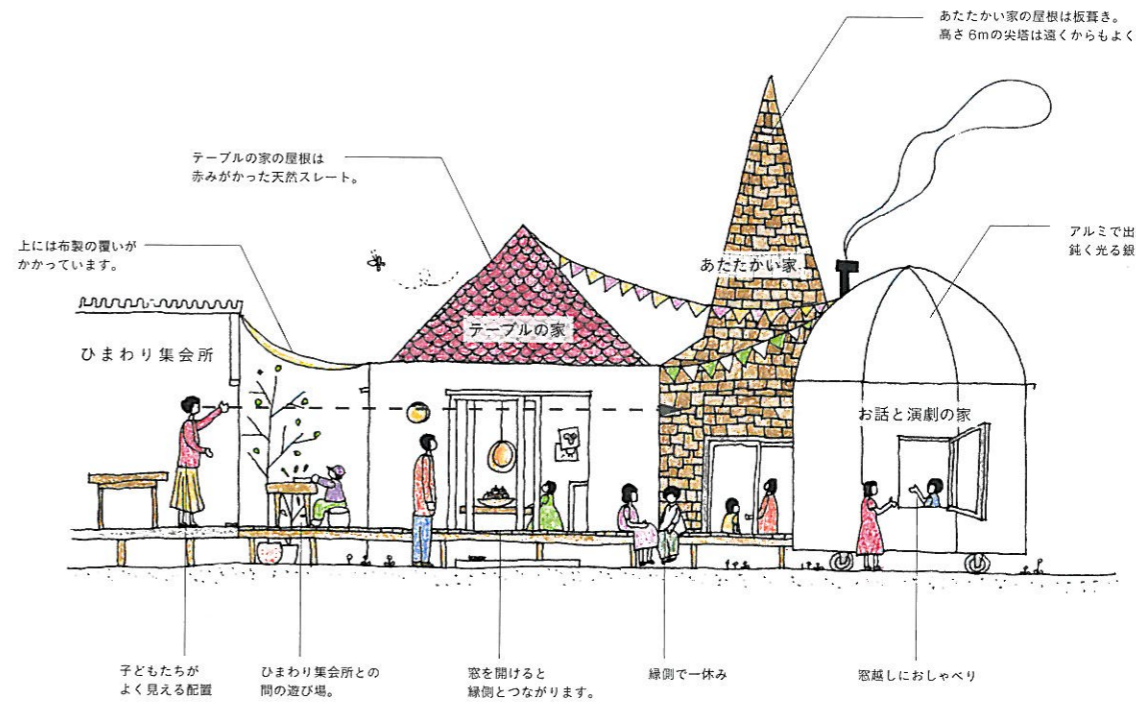
また、アスファルト上に描かれた葉っぱは他ボランティア団体によって描かれたものらしい。管理運営は「こどものみんなの家」に隣接し、テント屋根のかかった縁側で連結された「グリーンタウンやもとひまわり集会所」が行う。集会所の運営メンバーは仮設住宅入居後に住民たちにより結成され、彼らは全国から寄せられた支援をもとに仮設住宅の住民たちをサポートしてきた。「ひまわり集会所」はその活動の拠点となってきた。メンバーの中心となる内海聡子氏によると、今後は月に数回程度の子どものイベントを企画していく意向だ。「こどものみんなの家」もまた、地域の自主的な運営のもと、活き活きとした活動が生まれてくるに違いない。

1月26日、大勢の住民が見守る中、Tポイント・ジャパン主催で竣工引渡式が行われた。冒頭の設計者挨拶で伊東氏は、現在の日本は建築をつくるのが悪いことのような風潮になっていると指摘しつつ、「これから育っていくお子さんたちが毎日使ってください、みんなで(場所を)つくっていくんだという気持ちになってほしい」と述べた。一方、仮設住宅に2カ月間滞在しながら現場を見守ってきた大西氏は「通りかかった人が声をかけてくださったり、工事の後片付けに手を貸してくださいました、子どもたちが現場に遊びに来てくれたり、勇気をいただいたり、頑張ることができました」と住民と一緒につくってきたエピソードを話した。

本誌の中で伊東氏は「脱近代建築5原則」を挙げている(79~83頁)。仙台市宮城野区から始まった一連の「みんなの家」を取材する中で、運営者や利用する住民の方々に話を伺った。拠点を維持管理し、その空間を適切に活用していく多くの叡智に触れることができた。もし6番目の原則があるとしたら、ハードもソフトも「みんなで作る」ことなのかもしれない。



平面図スケッチ



立面図スケッチ